

田辺元におけるニーチェの問題

浮田雄一

はじめに

田辺元(明一八一—昭三七〇)が最初にニーチェに出会った時期を確定する資料は、現在のところ無いといえる。しかし、田辺が東京帝国大学数学科に入学する明治三十七年、及び哲学科に転科する翌三十八年は、西洋思想受容の第二期にあたる近代哲学史上重要な時期である。日本におけるニーチェ思想の紹介は二十八年に始まり、三十二年には日本人による初めてのニーチェ論が発表されている。また三十四年には、高山樗牛らによる「美的生活論」論争が展開される。人生問題から哲学科へ転科した田辺は、このようなニーチェ思想の受容と批判について何らかの知識を得ていたと思われる。

また、田辺が文部省在外研究員としてドイツに留学するのは、

大正十一年である。ここで田辺は、当時ドイツで問題となっていた生の哲学者デイルタイの研究を行なっている。従ってこのドイツ滞在の時期に、「生の哲学」の創始者であるニーチェについて認識を深めたといえる。しかし田辺がニーチェの思想を直接論じるのは、「種の論理」に対する自己批判の書として書かれた『懺悔道としての哲学』(昭和二十一年)においてである。この後期の田辺哲学—懺悔道を中心に、田辺のニーチェ理解を論究する。

一 懺悔道

「懺悔」とは理性批判である。田辺は自己の哲学である「懺悔道」を *Metanoetik* と称するが、それは *Meta-noia* (後—思) としての懺悔後悔の道の自覚とともに、*Meta-noyos* (超—観) の自覚を意味している。しかしこのような自覚は、自力的に到達し得

る達観の世界ではない。懺悔に内在する自力は、他力の転換媒介によって行ぜられる自力性である。すなわち、大戦末期における思想家としての行詰まりの、極端的真実の告白絶望と、現実との対決の行詰まりの無力の自覚が、田辺を自己放棄の懺悔の行に向かわせ、それが逆に自己を「現実そのものの実践的展開に対する媒介として復活せしめられた」⁽²⁾。その転換過程を弁証する哲学は、絶対他力の理性批判である。「哲学即懺悔道」の内的必然の強烈が、自己放棄の絶対無において成立する時、哲学はすでに哲学でなく懺悔としてのみ可能なものとして「懺悔道即哲学」という真実が唯一の生として、そこに死復活を体感自覚したといえる。

この「懺悔道としての哲学」の中心概念は、絶対批判と絶対無であるが、その根底には「絶対媒介の思想」がある。存在するものはいかなるものも独自にそれ自身で存在するものは無く、全てものは必ず他者によって媒介されねばならないとするこの思想は、懺悔道において否定媒介の契機として働いている。

理性批判として懺悔は、理性の理的立場を徹底的に問うことにより、理性による理性の絶対分裂という危機へと自己を追い込み、そこからの脱出が分裂崩壊する理性の中へ自ら進み身を投ずるという方法を、唯一最後の道として自覚されることとなる。従って「懺悔」とは、徹底的な自力の放棄であり、自力的自己の崩壊を意味している。田辺はこのような理性的・自力的行為の破綻崩壊の場を「無底の底」といい、その「無底の底」において一度崩壊

した自己が転換され回復されると理解する。「絶対無」は、自己が「無底の底」つまり「絶対無」へと自己を投げ入れ、そこで転換され自己を回復するという形でのみ行証されるのであり、田辺はこれを「死復活」と呼んでいる。真の実存は、自己を「死復活」における絶対否定の媒介として認識するところにあり、そこにおいて真の主体性—自立性が回復成立するのである。

二 「運命愛」の絶対否定性

田辺にとってニーチェは、その行為の根本的性格の相違にもかかわらず、「人間を弱める同情を排し人間を強める苦難超克の福音」⁽³⁾を説いた思想家として「深い尊敬と親愛」とを抱かしめる対象である。

このようなニーチェの思想に対し、田辺は次の三項目からの理解と批判を行なっている⁽⁴⁾。

- 一、ニーチェの思想の根底をなすものは、「絶対無的なるもの」である。
- 二、ニーチェが理性を排除し生命の立場に立って Dionysos の絶対転化生成を説いたのは、田辺の言う「絶対転換」を生命の連続から観たものであり、その精神は一致する。
- 三、ニーチェの理性は、「自己突破をもって本質」とする田辺の理性とは異なり、「同一性論理の悟性」であるが、しかし、ニーチェの理性のもつ否定的超越性は、田辺の「否定媒介的

構造」を自覚したものと云える。

以上のことを明確にするために、田辺はニーチェを論じるのであるが、まずニーチェ哲学の根本を如何に観ているかが問われねばならない。

ニーチェの初期の論文『悲劇の誕生』⁽⁵⁾は、Dionysos が自己の生の豊穡と過剰から生そのものを苦悩としてとらえ、生を否定する厭世観が、かえて「生の自信と豊富とを高めるといふ弁証法」⁽⁶⁾である。ニーチェが無を説きニヒリズムを語るのには、根本的にこの Dionysos 的生の豊穡と苦悩とを根拠としている。しかしニーチェのニヒリズムは歴史批判として、既存の最高価値に対する否 (Nein) を含意しているものであり、従ってニヒルとは、第一に無意味・無価値の意味である。価値の転換を歴史的必然と説くニーチェのニヒリズムは、現存在の破滅性・不安定性の暴露という性格を避けえない。この現存在の破滅性という極限的否定性を選択することなく喜び迎え、さらに進んで肯定することにより自己の意志へと転換する Dionysos 的生への意志は、ニーチェによって絶対的肯定と呼ばれる。田辺はこの絶対的肯定がそのまま田辺の言う絶対否定の現成であると考える。この問題は、生の Dionysos 的根源的意志を根拠とする「運命愛」(amor fati) の理解において、より具体的になる。

「必然なるものへの愛」としてのニーチェの「運命愛」の思想は、「斯くありき」という過去を、「我その斯くあるを欲せり」という現在の意志へと転換することにより、必然を自ら選び取った「解脱する自由」として肯定する権力意志 (Wille zur Macht) である。従ってこの権力意志は、「斯くありき」という過去のものと二重の側面、すなわち、既に過ぎ去ったものとして、人間のどうすることもできない過去の一面と、不断に現在に環帰して現在を横領し圧迫する一面との二重の側面をもつ過去を、進んで肯定し、その中に自己を否定突破することにより、逆にそれ自らが突破されて「自己の自由の内容に転ぜられる」のである。⁽⁷⁾「権力意志によって現在が過去を超越して自在を得る」のである。田辺はこの思想の根底にある絶対虚無主義は、「懺悔道の哲学」の論理である「絶対転換の原理としての無」に通ずるものであると理解する。

すなわち、ニーチェの「運命愛」の思想は一切を必然と理解し、没落・破滅・死をも回避することなく、進んで意志して引き受ける絶対肯定であるが、しかしその本質は、「必然なるものの中に自己を死なしめる」⁽⁹⁾ところの絶対否定を媒介としている。絶対否定は否定の否定として極限的否定を意味し、どのような否定を加えてもはや否定となり得ないものとして絶対肯定といえる。しかし田辺は、この絶対肯定は、「絶対否定を……その成立過程においてではなく成立の結果から見ていうに過ぎない」⁽¹⁰⁾ものであり、

絶対否定を捨象してどのような絶対肯定も存在しないと考える。

つまり、否定の否定の媒介を含まない直接の肯定は、例えそれを絶対的と規定したとしても、否定の相対的対立を避けることはできない。一般に肯定及び有といわれるものは、対立概念としての否定或いは無との関係において直接存在するものであり、どこまでも相対性を脱却し得ない。田辺は「絶対的なるもの」を規定して次のように言う。「ただ無をも否定をもなお否定して絶対否定即肯定なる媒介態なるものより外には無い」と。従って、ニーチェの運命愛における絶対肯定は、その本質的構造において絶対否定にほかならないと論断するのである。

三 「理性」の絶対否定性

田辺とニーチェの根本的相違の一つは、「理性」に対する認識にある。カントの理性批判は、理性による一切の權威の批判を意味するが、理性自身は何ら批判の対象となることなく措定されている。しかし理性は、その本質的構造においてすでに二律背反の矛盾を内包しているのであり、カントの理性の批判に立つ田辺にとって、理性とは二律背反後の「死復活の能力」を意味している。すなわち、理性は自己内在的二律背反の矛盾という分裂の危機に、自己自らをそこに投棄し、その自己を突破する行信の行為において往相の道を歩むのであり、自己突破としての自己批判は、再び証の媒介知へと還相せられる。その行信証が理性の自己超越であ

る主なき絶対批判である。理性の自律的自由は「自己の無を行信証する絶対批判に於て自己を超越する」⁽¹³⁾のであり、これが「理性の死復活」である。すなわち理性は「無限と有限・必然と自由」等の二律背反の不可避性に崩壊することによって、かえってその中から復活される。従って理性は「超理性性に転ぜられる媒介性に於てのみ存する」⁽¹⁴⁾といわれる。

しかしニーチェは、理性を觀念論的意味での小さい理性 (*kleine Vernunft*) と、さらにその小さい理性をも内包した大きな理性 (*grosse Vernunft*) として「身体」 (*Leib*) を考へる⁽¹⁵⁾。すなわち理性を生命に置き換えるといえる。ニーチェは、理性の同一性的統一を前提とするが、しかしその拘束を避け田辺の言う「死復活の循環的發展」を、理性よりより具体的な生命の本質に属するものとする。存在を越えた生成転化の主体としての生命を理性に置き換え、田辺の絶対無の代りに絶対有を哲学の根本原理とした。つまりニーチェは、(1)カントの理性による理的立場から生命による事的立場への転換をなし、(2)田辺の「絶対無の現成としての理性の懺悔的否定」に対し「生命の絶対肯定」を置こうとする⁽¹⁶⁾。かくて全てを自己の支配下に置き入れようとする權力意志を生命の本質と理解するのである。

田辺は、ニーチェが転換 (*Wechsel*) と転化生成 (*Werdan*) という語を同義に解することを批判する。ニーチェは「自己」を対他的対象として問題とせず対自的にのみ把握し、生命と同一視す

ることにより「生命の本能的自己主張たる権力意志として主体化」した。しかしこのような主体は単なる我性にすぎず、従って権力意志は「我性の自己肯定」の主張に止どまっている。このような立場からは、他を媒介することによってのみ対目的であり得る「自己」の存在は決して成立し得ない。

田辺は「全く無媒介」に生の連続が転化し生成することを「生成的転化」の意味とし、「自立的なる主体の一が他に更代代換せられること」を「転換」という。このような主体の交代転換は、非連続的・断続的であつて、この転換の媒介をなすのが自我の絶対無的行である。この絶対無によつて否定される自立的主体は、理性的自我の立場に立つ自己である。しかし理性的自我の転換媒介の自覚が自力的行為に止どまっているのが、ニーチェの超人(Ubermensch)思想であり、実存哲学の限界を示している。この実存の限界を突破するものが他力行である。懺悔道はこの「他力行の転換」を説くものであり、転換契機としての絶対無を説く思想である。絶対無は否定的自己において絶対無に対し、そこで啓示的自己を自覚するという考えは、西田の「矛盾的自己同一」の思想に近いものといえる。すなわち、田辺にとつて「私」の存在は無の媒介として方便的存在である。実存的自己存在は、この「転換の主体として無の媒介」でなければならぬ。しかしニーチェの権力意志は、自力的生の徹底としてあくまで有を根底とした無の思想であり賢者の聖道門である。懺悔道の「絶対転換の論

理としての無」とUbermenschの根底にある絶対虚無主義は、その絶対否定の構造において共通すると田辺は指摘するが、しかし田辺は、絶対他力の懺悔に生の真実を見る易行道を説くのである。

- (1) 吉田静致「ニーチェ氏の哲学」『哲学雑誌』一月、一四三頁。
- (2) 「実存と愛と実践」田辺元全集(以下全集)筑摩書房、昭和三十八年、九卷、二七二頁。
- (3) 「懺悔道としての哲学」全集九卷、一一三頁。
- (4) 同、一〇六頁。
- (5) Nietzsche, F.: Die Geburt der Tragödie, 1870.
- (6) 「懺悔道としての哲学」全集九卷、一〇四頁。
- (7) 同、一一二頁。
- (8) 同、一一二頁。
- (9) 同、一〇三頁。
- (10) 同、一〇三頁。
- (11) 同、一〇四頁。
- (12) 同、一〇七頁。
- (13) 同、五〇頁。
- (14) 同、一〇八頁。
- (15) Nietzsche, F.: Also sprach Zarathustra, Kritische Gesamtausgabe VII, Walter de Gruyter, Berlin, 1968, S. 35.
- (16) 「懺悔道としての哲学」全集九卷、一〇八頁。
- (17) 同、一一〇頁。
- (18) 同、一〇九—一一〇頁。
- (19) 同、一一〇頁。

(うきた・ゆういち、西洋哲学・比較哲学、大正大学大学院)